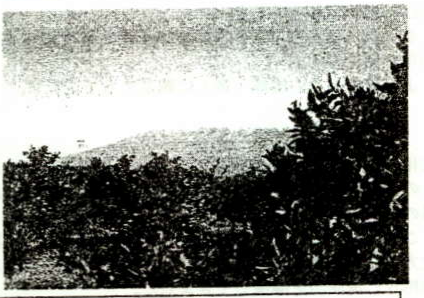
富士山麓の歴史と文化を訪ねて

野間清治顕彰会会員
(伊勢崎在住)
柏倉　喜久枝

第五回の研修旅行では、富士山麓に香る歴史と文化に触れ、さらに富士川にある野間家の別荘「古渓荘」を訪問したのである。東名高速の御殿場あたりにさしかかると、雲の切れ間に富士の山肌が見えてきた。やがて、手に届くかと思われるところにまで接近、美しい稜線は、何ものをも寄せつけないほどの神々しさと、限りないやさしさを併せもち、心の中にぐいぐいと入りこんできた。もう口をあんぐりとあけ、富士の前に我が身のすべてを放った。そして山中湖畔の文学の森公園の中に、ひっそりとたたずむようにして建つ三島由紀夫文学館では、彼の、カミソリのようにとぎすまされた作品の数々を目の前にしていると、学生時代、放課後の図書室で読んだ、「潮騒」を思い出す。胸をときめかせながら、時には強いショックを受けながら、三島文学の持つ芳醇な香りに、身も心も酔わされてしまったあの頃が、今となっては懐かしい。又、隣には、近代日本の偉大な思想家として活躍した、徳富蘇峰館、いづれも自己をきびしく見つめて燃え尽きた先人たちである。富士の限りなくやさしい姿と豊かな自然の中に、作者を彷彿とさせるような文学館、そして、そこはかとなく漂わせる当時の作品の気高さ、これらがひとつに溶け合って、その感動は絶頂に達したのである。富士宮では白糸の滝も見学。富士山の溶岩壁のあらゆる隙間から、白糸が伸びるように滝の姿は、やさしさに満ち、視界全体が白い水の糸に煙ったような幻想的な滝つぼの周辺に立っていると、あたりの景色にすっぽりと包まれるようで、清涼感を通りこして霊験なるものを感じたのである。その日、夕食後岡田事務局長が胡弓を演奏してくださった。「習いたてだよ。」身を揺すぶりながら目を閉じている。その胡弓の音色が心とひとつとけ合って、哀愁をおびて流れてくる。「荒城の地月」に耳を傾けていると、すき透るような音色に、導かれながら、これまで歩んできた日々の一コマ一コマが胸にあふれ、熱いものがどっとこみあげてきた。ひとすじ頬を伝わる涙、旅情に酔っただけではない。胡弓の持つ音色のやさしさが、事務局長のお人柄と重なって、深く心を打たれ、忘れられない夜になった。

朝方、丘の上から見た、ピンクに光り輝く富士の山肌に、神が宿っているのかと思うほどの強い感動を覚えた。又、富士川西岸の高台に建つ、古渓荘。その赤松林より望む男性的な富士に対して、みかん園から見た富士は、谷川の水でぶるるんと顔を洗った小娘のようで、ことさら親近感を覚えた。今回の旅で、富士のさまざまな姿を堪能できたことは私にとって嬉しい限りである。

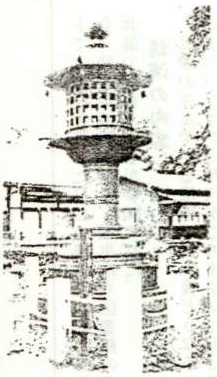


甦れ埋れた文化財　～その1～

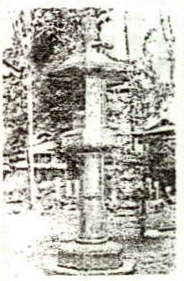
桐生天満宮『鉄灯篭』

天満宮本殿前左側にある「南蛮鉄灯篭」大日本鋳工棟梁名越弥五郎作、松竹梅及び唐獅子の図（谷文晁の画）がある。桐生の豪商、伝翁吉右衛門氏の奉納によるもので、幕末の作と推定される。高さ1，21メートル、風雪にさらされて、かなり傷んできているが、後世にのこしたい文化遺産である。

同じ鉄灯篭（写真左）が徳川氏発祥の地、世良田東照宮にある。明暦四年秋元越中守藤原長朝の曽孫喬　朝が奉納したもので、高さ4，95メートルこれは国指定の重要文化財であるが、天満宮にある鉄燈篭もこれにつぐ製作優秀なものである。



世良田東照宮の鉄灯篭



桐生天満宮の鉄灯篭

(仮称)野間記念館建設推進プロジェクト

野間清治顕彰会
副会長　大西康之

・野間記念館建設推進部ができました。

それで、漠然としたその内容について会員がどのように考えているか聞き取り調査から始めました。野間記念館といったらどんなイメージですかと聞きましたが、具体的な考えを述べていただいた方もいました。

・時期や建物や場所やお金などについて寄せられた基本的な認識についてなど幾つかを取り上げてみますと。

・日本中に発信できる桐生のなかでも大切なもの。

・都会的でありながら自然を感じさせる佇まい。

・美術品を見るだけでなく人生を燃焼させた精神も顕彰することができる。

・講談社の新刊などもおけたらなどなどです。

さて、今年度の方向ですが、今年度はいわゆるプロジェクトを作って継続的具体的に取り組んでいくこととしたいと考えています。

野間清治記念館建設推進プロジェクトについて、私大西が部長を勤めます。会員の皆さん「記念館建設推進部」に入ってください。おまちしています。